

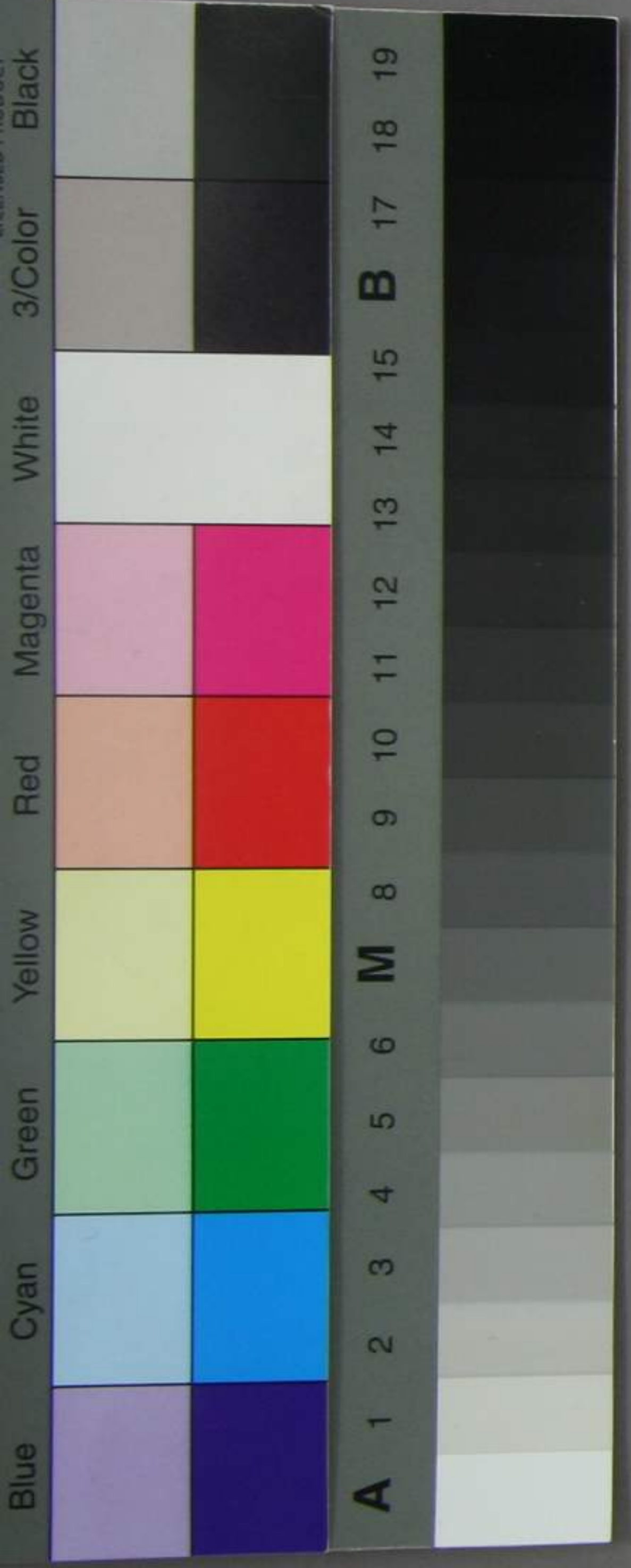
114
A 4416



大正十一年四月贈
大隈侯爵邸

如キ一夫衆婦ヲ娶ル國ニ於テハ甚ク異
ナリ妻タル者石婦タルノ故ヲ以テ其地位ヲ失
ハサレヒ其夫ニ對シ最初娶ラレタル時期望
セラレタル天然ノ職分^{子ヲ産}ヲ盡ス能ハザ
ルカ故假令自ラ好ニスト虫ニ之ヲ他ノ人ニ托
シテ自ラ救ヒ其安シ難キ地位ヲ失ハサル様
ニ配憲セサルヘカサル事ト為ス此規則一
轉シテ妻ヲ置ク例ト為レリ即チ定例ニ
據レハ妻ヲ家ニ入ルノ前必ス先ツ之ヲ
妻ニ議セサルヘカラス其之ヲ入ルノ後ハ

A 4447
111



妻ノ妻ニ對スル一ニ婢ノ主婦ニ對スルカ如シ
妻子ヲ産スレハ妻取テ以テ己レノ子ト為ス
得其子男ナレハ公然後嗣ト為リ父ノ權利ヲ襲
ク概シテ妻ハ生育教訓共ニ妻ニ如カサル者ナ
ルカ故(東照公御遺訓四十六條ヲ見ヨ)妻ノ為ニ
妻顧ラレサルトアルハ妻之ヲ夫ニ愁訴スレ
テ得而シテ言フ所聽カレサレハ公論ノ助ケテ
得ヘク(註)其後許サレテ離縁スレテ得此ノ如ク
(註)是レ欧米両土中ニ於テ概多ク婦人ノ缺典
ナリ日本ノ婦人ハ此一事ニ於テ長スレ所ノ

妻ヲ置クノ定例モ夫妻トシテ偶々為シ借措老ス
ル男女ノ共ニ繫カル、一種別段ノ要求ニ干格
セスシテ男ノ便利ト女ノ保護トニナル所アル
ヲ以テ天意ニ適スルヲ知ルナリ妻ノ家ニ在
ルハ之ヲ駁スルノ説多ケレ氏一夫一婦ノ固ニ
於テ往々コレアルカ如ク別婦ヲ家外ニ置クニ
勝ルテ遠シ(註)妻ナル者固ヨリ權ナキカ故妻ノ
(註)余固ヨリ妻ヲ家ニ置クノ不正道ナルヲ
知ル然レ氏其法決シテ行ハレヌ能ク一夫

一婦ノ道ヲ守ル者僅々ノミ而シテ妻ヲ
置クハ一夫一婦國ニテ行ハル^{私通}、惡風
勝レリ

為ニ懼ルヘキ者ニ非スレテ却テ夫ノ正行ヲ保
証スル者トナル夫タル者容色ノ為ニ或ハ一時
心ヲ妾ニ傾クルト妻ヲリ大ナルトアルヘク
レト畢竟一家ノ中ニ於テ最大最重ナル子ト共
身代トニ至テハ之ヲ為ニ少シモ動クトナシ
嬖妾家ニ在テ妻タル者嫉妬ノ念ヲ懷キ隨テ狂
乱慘毒ノ事日本ニ往マコレアルハ予亦之ヲ知

ル然レ氏是レハ免レ難キ不幸ナリ妻タル者故
アリテ夫ノ心ニ適セサルキハ獨日本ニ於テノ
ミナラス萬國ニ在テモ婦萬事其心ニ歛スル如
クスルヲ得サルヘク此時ニ當テハ婦必ス傷心憂
苦スヘシ然レ氏是レハ命數ニシテ猶疾病孔生
及ヒ他ノ災厄ノコトク人カヲ以テ免ル能ハザ
ル者ナリ抑一夫一婦ヲ主張レテ妻ヲ置クトテ
非トスル者ハ天然ノ分限ヲ踰エ宣教ノ職ヲ尽
スヨリハ却テ之ヲ毀却スト謂フヘシ天然ノ分
限ヲ守ルト德ニシテ之ヲ踰エルト不徳ナレハ予

惟フニ一夫一婦ノ説ハ愛ノ上ヨリシテ婦人ヲ
誘導シテ非望ヲ抱カシノ西洋人ノ称スルカ如
ク国ヲ強クスル基ヲ立テス却テ国ヲ弱クスル源
ヲ開キタリ是レ一夫一婦ノ家ニ於テ婦人ノ位置
如何ヲ觀ハ判然明亮ナルヘキナリ
一夫一婦ハ各人ノ氣カヲ過勞セシムルヲ以テ
人ヲシテ人間ノ實益ヲ大ニスルニ急ナラシメ
隨テ他人ノ上ニ出ツル實証トシテ富貴利達ヲ
過重スルノ心ヲ生マシメ婦人ヲシテ夫ト勞ヲ
分タスシテ夫ト同シク不羈自由ノ生ヲ得セシ

メレト欲スルヨリシテ終ニ改米西土ニ於テ夫
婦結婚シテ一家ヲ立ツルニ其費用甚タ多ク各
人概多クハ之ヲ支ユル能ハサルニ至レリ是ニ
由テ定例ノ費用ヲ免ル、ノ最良ナル策トシテ
獨居セント欲スル者多シ蓋シ能ク其定例ノ費
用ヲ支ヘ得ル者甚タ稀ナリ其実果ハ婦人ノ行
不正トナリ或ハ終ニ嫁セサルアリ(註)或ハ晚年
ニ及テ嫁ス抑生ル、所、者男女其数同シケレ
(註)二十六丁ニ載スル第十一、表ニ由テ知ル
ヘキ如クエタニ移リ来ル婦人多クハ英國ヲ

国ヨリスル者ナルカ其国ニ不嫁ノ婦人ノ比
例毎日増加スル実ニ驚クヘシ此不幸ナル者
ノ中エタニ往カサル者ハアウスダラリ一或
ハニウゼーランドニ赴キ其夫ヲ求ム此婦人
等ノ英国ニテ婦人ノ苦難スル状ヲ述フルヲ
聞クキハ実ニ人ヲシテ心ヲ病マシム
凡児童某ノ歳ニ至ルノ後ニ之ヲ算スレハ男児
ノ死スル一女子ヨリ多クシテ女子ノ数男児ヨ
リ多クナル一夫衆婦ヲ娶ル風ハ一夫一婦ニシ
テ且ツ数妾ヲ置クヲ得ルカ故一夫一婦ノミナ

レハ終ニ沈ニテ浮ム能ハサルヘキ不幸ノ婦人
モ亦倚頼スル所アルヲ得又或ハ婦人ノ早ク成
長ニテ婚スヘキ国アリ一夫一婦ノ時ハ此等ノ
婦人モ歳既ニ晩ニテ猶婚スルヲ得ス即テ佛蘭
西ノ如キ婦人多クハ二十五歳ニ至ラサレハ婚
スル能ハス是ニ由テ其情ヲ忍ビ自ラ戒メテ期
ヲ待ツ一八年乃至ハ十年ナルヘク是レ婦人最
懼ルヘキ心身ノ疾病ヲ生スル者多キ所以ナリ
又男子ニ至テハ早ク夫婦同棲ノ快樂ヲ棄ツル
ヲ悟リ自ラ甘ミテ一夫衆婦ノ風ト異ナラサ

ル行ヲ為シテ其生ヲ終ルニ至ル此時ニ至テハ、
其一夫衆婦ノ風甚タ惡ク婦人モ日本ニ於ケル
カ如ク倚頼スル所アラズ男女ノ為メニ共ニ害
多シ男ハ折エス婦ノ異ナルヲ以テ情欲常ニ厭
ラス女ハ其生ヲ失ハサレモ健康ヲ害シテ以テ
生殖ヲ男ニ與フルノ氣ヲ喪フニ至リ易ク又早
クヨリ此様ノ風儀ニ浸深スルヲ以テ男子後ニ
至リ婚娶スルニアルモ既ニ破枯敗壞一生已
ニ授カリタル正偶ヲシテ全クサラサレモ殆ト
幸福多カラシムルニ是ラサルナリ予ヲ以テ此

正偶ヲ見レハ男子ハ早歳ノ時妄淫シテ既ニ形
體ヲ羸ラシ婦人ハ一身ノ憂苦ノ為ニ心氣ヲ損
シタルナレハ此間ニ子生ルニアルモ其心身
ノ性質不良ニシテ西親之ヲ見ハ却テ自ら少壯
ノ時不行跡ヲ考シタルヲ想出スルノ具タルニ
過キサルヘシ人種ノ惡クナル亦是レヨリス今
ヲ去ル四十年以來歐羅巴ニテ判然其証ヲ見ル
是レ空説ニ非サルナリ佛蘭西ノ如キ微興薄ノ
設アルヲ以テ其国人ノ身体強弱ヲ驗知スル
為ニ易ク其漸々孱弱ト為リタルヲ知ルニハ百

百三十一年ヨリ千八百三十七年ニ至ルマテノ
間ハ軍役ニ不適當ナル壯丁ノ数僅ニ四十六萬
ナリシカ次ノ七ケ年間ニ其数三萬一千ヲ増シ
婚姻スル者ノ数モ亦恐ルヘキ割合ニ減シ千八
百五十一年ニハ其前年ヨリ九千ヲ減シ千八百
五十二年ニハ千八百五十一年ヨリ七千ヲ減ス
故ニ千八百五十年ニ比スレハ一万六千ノ減シ
ナリ千八百五十六年ノ官著表記ヲ見ルニ人口
減シ或ハ依然増スリナシ(註) 其他政羅巴右国ニ

(註)

至テモ亦之ト同シ(註) 見ル獨リ米國ニ於テ此
事ナキハ其國元來三億六千萬口ノ人住スヘキ
地アリテ今僅ニ四千万口アルガ故自ラ生ヲ營
ニ易キカ故其害ヲ免ルノミ
日本ニテ婦人ノ為ニ交際上第一ノ惡弊ハ一夫
衆婦ニ非ス婦人ノ(修身ノ法ニ就テ比較ヲ立ツ
ルニ)全ク賤方ナルト母タル上ニ就キ必用トス
徳ヲ養成スル注意、甚タ少キトニ在リ日本ノ
政府ニ在ル人此惡弊ヲ察シタルガ故既ニ之ヲ

除カント改革ヲ為シケルガ故必ス功ヲ成ス
アルヘシ其成功スルニ至テハ惟フニ一夫衆婦
ノ説ニ左祖スル者多ク出テ今日之ヲ擯斥スル
徒ノ中ニモ必ス其説ヲ変スル者アルヘシ何ン
トナレハ上ニ説キタル如ク婦人ヲ偏愛スルニ
基ツクト云フノ外一夫一婦ヲ非トスル説ノ最
強キ者ハ男子ヲ淫蕩ニ流レシメテ終ニ其子孫
ノ衰敗ヲ起スヘケレハナリ(註)而シテ是レ万人
(註)羅馬人品行嚴ナラス子孫氣力衰エ終ニ其
國ノ滅亡ヲ醸スノ一大原因ト為レリジユブ

エナル云フ恥ヲ忘レサル者稀ニシテ他人ノ
笑具ト為リ終ニ自棄ノ人ト為ル(羅馬)
當ニ心ヲ留メテ熟考スヘキ所押品行ヲ不正
ニスル者ト男子ノ氣力ヲ抑曲シテ發達セシ
メサル者ト嫁シタル婦人ノ幸福ヲ害スル者ト
ハ(註)一夫衆婦ニ非スシテ婦人ノ身ヲ(註)同上
八十三八十四丁ヲ見ヨ汚スニ在リ是レ歐羅巴
ニ於テ然ル如ク亦日本ノ大患ナリ而シテ此
患歐羅巴ニ於テハ婚姻スル者ノ少キカ為リ
ニ弥感ナルト程日本ニ於テ男子ノ昏愚ナル

カ為ニ弥盛ナルカコトキナリ日本ノ婦人更ニ
善ク教育ヲ受テ家人ノ気ヲ得ルヲアルニ
至ラハ其身ヲ汚スヲ随テ大ニ減スヘク且ソ
日本ニ此患永ク存シテ醜體ヲ極ムト虽モ是
レ此国人ノ性淫蕩ニ流レ易キカ為メニ非スニ
テ封建ノ制ノ餘弊ナルヲ予ノ信スル所ナリ蓋
シ封建ノ世ニハ許多ノ武人常ニ奔走シテ家ヲ
定メス之レカ為メニ婦人ノ身ヲ汚スヲ武人ノ
為メニ便ニシテ婦人ノ為ニモ依頼ヲ術タリシ
ナラン然レモ日本進歩シタル故此風忽チ既

ニ跡ヲ減ロントシ男子タル者今日ニ
比スレハ多ク栄生ニ心ヲ費ヤスヘキ
ニ至ルヲ以テ復タ淫蕩游戲スル
ニ違ナク日本ニテモエタノ如ク
此患極メテ鮮キニ至ルノ日遠カラサルヘシ

此一事ヲ論シ尽クサントニハ教卷ノ書ヲ著ハ
サルヲ得ス然ルニ此小冊子中紙數ノ限リアリ
テ固ト詳論細説ヲ載ス可キニ非レハ高名ナル
經濟学者タル司法省ノ教師ボワソナードドフラ

シタラビー氏ノ論說數葉ヲ此ニ添加シ以テ前
文ノ說ヲ確定セシムルノミナラス亦其中ノ缺
ヲ補ハシメントス

ボワソナード氏ハ特ニ余カ目的ノ為ニ其論
說ヲ著ハシタルハ其好意ト其論說ノ巧妙ナ
ルハ余ニ於テ感謝スル所ナリ

第六章

教婦ヲ置クノ慣習ハ往時ニ在ニモ方今ニ在テ
モ西洋人ノ之ヲ批評スルニ必ス法教上ノ意見

即チ耶蘇教上ノ意見ヲ以テスルヲ常トシ一般
普通ノ修身ノ意見ヲ以テセニハ極メテ市有
ノ事ニ属セリ然ルニ今余カ此書中ニ右ノ慣習
ヲ批評スルハ獨リ修身ノ意見ヲ以テセント
ス
凡ソ昔時ノ法教ハ教婦ヲ置クヲ禁セス夫ノ猶
太教ノ如キハ各人修身ノ道ヲ教ユルニ於テ極
メテ嚴密ナル者ト虽モ亦此慣習ヲ禁セサレハ
當時ノ法律上ニ此慣習ヲ制禁スル者極メ
テ稀ナリ

希臘及羅馬ノ二國ハ未ク耶蘇教ノ行ハレ
サル前ヨリシテ夫ノ純清嚴密ナルストイック
派ノ修身教ニ動カサレテ一夫一婦ノ法ヲ定メ
タリ然リ而モ羅馬ノ法律ニハ妾ヲ蓄ムルヲ許
ルシ妾ノ權利ヲ定メタレ氏妾ヲ名ケテ左手ノ
妻ト云ヒ數妾ヲ蓄フルハ之ヲ許サス又正妻ア
ル者ニハ妾ヲ蓄ノルヲ許サ、リレナリ
羅馬ハ當時人ノ知レル世界ノ各地ヲ攻畧シタ
ル後其各地ノ人民ノ為メ婚姻ノ事ニ管セル由
来ノ民法ヲ存シ置クヲ許ルセシテ猶爾餘ノ各

事ニ於ケルト異ナルナレ然リト虽モ耶蘇教ノ
漸々西洋各地ニ行ハル、ニ及、テハ教婦ヲ
置クノ慣習ヲ廢セル目今ニ於テハ法教上ノ
法律ト民法トノ二者ヲ分離シテ互ニ之ヲ不羈
タラシメント為ス條件ニ就テモ當時ニ在テハ
却テ此二者ヲ混同セシメタリ
回々教ノ國ニ於テハ民法ト法教上ノ法律ト相
混同スルニ因リ右ニ記スル所ニ及セシ効績ヲ
生セシメ夫ノヨラシ、回々教ノ聖經ハ法教上ノ法律ト
民法トノ二者ヲ兼テ定ムル者ニシテ其中ニ數

婦ヲ置クノ慣習ヲ許ルニ剩サヘ之ヲ獎勵シタ
リ

支那ト日本ニ於テハ昔時ヨリ数婦ヲ置クノ習
慣アリシト見ヘ此兩國ノ立法者ハ(回々教
法者ト同シク)人ノ身分ニ因リ其婦ノ数ヲ或ハ
歳ニ限制シ或ハ寛ニ限制シタルニ過キサルノ
i

此兩國ニ於テ右ノ如ク婦ノ数ヲ限リタルハ土
耳其ニ於ケルト同シク經濟政治上ノ道理ニ基
キ決シテ修身ノ道理ニ基カサルヲ敢テ疑フ

容レズ何ントナレハ一旦数婦ヲ置クヲ許ルレ
強テ一夫一婦ノ道ヲ守ラシメタル上ハ從令綏
多ノ婦ヲ置クモ其數ノ為メ敢テ修身ノ道ヲ害
スルノ理アラサレハナリ

此ニ今耶蘇教上ノ意見ハ姑ク之ヲ措キ普通修
身ノ道ニ着眼シテ以テ日本ニ於ケル数婦ヲ
置クノ慣習ヲ考究スルニ凡ク数婦ノ置ク
許ルセル各國ニ於テハ一夫ノ數婦互ニ其名義
等級資益等ヲ同ウセサルニ疑ヒナク若シ其數
婦ヲシテ互ニ同等ナラシマル時ハ絶ヘズ家内

ニ紛紜混乱ヲ生セシム可シト虽モ現ニ然ラス
シテ正當ノ妻ハ必ス一名ニ限り而メ其正妻タ
ル者ハ最初ニ嫁シ来ル婦女歟又ハ婚禮式ノ最
モ鄭重ナル婦女ナル歟若クハ其父母親族ノ身
分等級ノ為メ其女ヲ妾ト為スヲ耻フル者ナル
ヲ通則トス

今試シニ問フ正妻ノ等級ヲシテ妻ノ上ニ在ラ
シメ正妻ノ子ノ權利ヲシテ妻ノ子ノ上ニ出テ
シムルハ修身ノ道ニ因レル所ナリヤ曰ク然ス
ス何ントナレハ婦女ヲ貴フ可キノ道ヲ循行セ

ント為スニハ數婦同等ヲ許ルモ敢テ差支ナ
ク若シ同等ナラシメサル時ハ田ノ得ル所ハ必
ズ乙ノ失フ所ニ係リ正妻ヲ貴ム時ハ必ス妾ヲ
賤メサル可カラサルニ因ル

又正妻ノ等級妻ノ上ニ在ル所以ヲ辨明スルニ
夫ノ權利上ノ理ヲ以テシ正妻ハ最初ニ嫁シ来
リシ者タレハ其後ニ至リ更ニ已レト同等ノ婦
ヲ容ルルニ及ハサル旨ヲ言フ者アリト虽モ是
レ亦敢テ理ニ違ヒシ説ニ非ス此論理ノ如キハ
歐洲ノ通言ニ其証多キニ過キ却テ何事ヲモ証

セトト謂フ者タリ因テ更ニ之ヲ言フニ若シ最
初嫁シ来リシ婦ノ其後ニ至リ已レト同等ノ婦
ヲ容ルサハル權利アリトセハ亦敢テ相競者ヲ
容ルサハル可キ權利アリト為ス可ク然レテ妻
ハ固ト妻ノ相競者ニレテ寵ヲ妻ト争ヒ其子ノ
權利ヲ維持スル為メ妻ト相競フ者タリ
正妻ノ其相競者ヲ容ルスニ抗拒ス可カラサル
所以ハ是レ蓋シ日本ノ最モ旧キ慣習ニ基キシ
婚姻約束ノ一ヶ条タルニ在リテ正妻ノ初メ
夫ノ家ニ嫁シ来リシ時ヨリ日後妻ヲ置ク

コトアルヲ財カラ承諾シタリト看做ス可キニ
因レリ
又正妻ノ已レト同等ノ婦ヲ容ルスニ及ハサル
所以ハ夫ノ家ノ清寧平穩ヲ保ス可キニ
在リ
然リ而シテ一夫ノ數婦中互ニ具等級ノ異ニスル
モ敢テ差支ナキ旨ヲ証スルノミヲ以テ是レ思
レリトセス一妻又ハ數妻ヲ置クハ一般普通ノ
修身ノ道ヲ害ス可キヤ否ヲ更ニ考究セザル
可カラス

此ニ今一回ノ事業ノ修身ノ道ニ適フタルヤ否
ヲ量定スルハ極メテ容易ナラスレテ修身上ノ
義務ヲ定ムルノ難キハ人民交友上ノ義務
又ハ法教上ノ義務ヲ定ムルト同日ノ論ニ
ラス

吾輩交友上ノ義務ハ人民一般ノ資益ヲ考ス
ル時ハ之ヲ知ルヲ難キニ非スレテ吾輩若シハ
民社会ノ利益ヲ害スル事業ヲ為ス時ハ交友上
ノ義務ニ背ク者ト言フ可シ
又吾輩法教上ノ義務ハ確固タル論説基本ヲ

ル經典法教開祖ノ教ニ因リ之ヲ定ムルヲ常ト
為セハ吾輩一箇ノ事業ヲ為スニ當リ其法教上
ノ義務ニ背キシヤ否ヲ量定スルヲ常ニ難キニ
非ス然レモ修身上ノ義務ニ背キタルヲ知ルハ
獨リ我カ本心衷情ニ在リテ此世ノ如何ナル哉
カト雖モ之ヲ定ムル能ハス如何ナル論説經典
定慣ト虽モ純然タル修身ノ道ハ之ヲ一定斷決
スル能ハス夫ノ孔子プラトアリストトール
セロノ如何ハ多少真道ニ近フキ多少其説ヲ同
ウスト虽モ要スルニ唯々僅カニ吾輩ヲ訓戒シ

我カ義務ヲ教ユルニ過キスレテ敢テ我輩ノ為
ノ法律ヲ確定スル能ハサルナリ
故ニ今普通ノ修身ノ道ト言フカ如キ其義意
頗ル曖昧ニシテ其修身ノ道ト称スル者ノ中ニ
孰キ爭論ノ常ニ絶ヘスレテ時ト国ニ因リ互
ニ其説ヲ全ク異ニスル者亦寡ナカラス而メ數
婦ヲ置ク事ノ如キハ丁度此類ノ者ニシテ東洋
各国ハ此事ヲ論スルニ常ニ全ク玖米各国ト其
説ヲ異ニセリ

一夫一婦ノ説ヲ主持スル輩ノ若レ法教上ノ憑

據ヲ棄テ以テ之ヲ論スル時ハ必ス婦女ヲ貴重
ス可キノ道ヲ以テ其憑據ト為スノ外敢テ他ノ
憑據ナク此輩ハ數婦ヲ置クヲ許ルニ時ハ正妻
ニ就キ之ヲ言フモ又妾ニ付キ之ヲ言フモ共ニ
同シク婦女ノ貴重ヲ減損ス可シト謂ヘリ
然レハ此輩ノ所謂婦女ノ貴重ハ男女ノ間ノ修
身上ノ權利義務ニ関スルニ非ス唯榮華名
目ニ管スル者タリ
因テ思フニ妻妾ノ皆其意ヲ以テ各々己レカ身
分ヲ承諾シテ之ニ甘ンシ且ツ夫ノ方ニ於テ敢

テ之ヲ欺キ或ハ己レカ威權ヲ恣ニ為スルアラ
サレハ之ヲ以テ修身ノ道ニ適ヒシ者ニ言フ可
シ

又或者ノ論ニ一家内ニ教婦ヲ置ク時ハ不節制
及ヒ淫逸ヲ惹起シテ風俗ヲ乱シ出生スル子ノ
清白ヲ害スル等ノ恐アリト言ヒ此言敢テ假偽
ノ者タラス間々真ニ然リト虽モ蓋シ其原由ハ
教婦ヲ置クニ在ラスレテ人類ノ孱弱ナルニ在
レハ縱令一夫一婦ノ別ヲ設クルモ此危害ヲ免
ル能ハスレテ間々姦通ノ罪ヲ犯サシムルニ

至ル而モ姦通ノ罪ハ各國ノ法律及ヒ修身法教
ノ道ニ皆ノ者タルヲ明クナリ蓋シ風俗ノ乱ル
ハ必スレモ教婦ヲ置クノ効績ニアラスレテ
其証ハ猶太國ノ史記ニ載スル教祖聖賢等ノ教
婦ヲ置キシヲ以テ之ヲ觀ル可シ

第二 經濟上ノ着眼 第一ト申條目ハ前文ニ見當リ不
申後得共原文ノ後ニ置候

此ニ今經濟上ノ着眼即チ社會資益上ノ着眼ヲ
以テ教婦ヲ置クノ慣習ヲ論スルニ其條目ヲ分
テ三トス曰ク

第一 教婦ヲ置クハ人口ノ増殖スルニ益ア

リヤ抑々又害アリヤ如何

茅ニ 其慣習ハ一夫ニ属スル数婦 康福ニ

益アリヤ抑々又害アリヤ

茅三 其慣習ハ夫ノ康福ニ益アリヤ抑々又

害アリヤ

因テ今左ニ此次序ヲ追テ之ヲ論セントス

第一 数婦ヲ置クハ人口増殖ニ益アリヤ抑々

又害アリヤ

抑々人口増減ノ疑團ノ如キハ其解キ難キ之ニ

過クル者ナノ之ニ饗應スル原因ハ其数頗ル多

ク若シ其増減ノ理ヲ考究スル為ノ一ノ原因ノ

シテ重要ノ者トシ他ノ原因ヲ措テ問ハサル時

ハ誤謬ヲ免ル、能ハサル可シ

其原因ハ時ト地トニ因テ変異シ例ヘハ凶歳又

ハ永キ理財上ノ妨碍アル時ハ出産ノ数ヲ減セ

シタルト却テ戦闘ヨリモ甚シク若シ之ニ反シ

貿易又ハ農業ノ繁昌ナル時ハ必ス出産ノ数ヲ

増ス可シ

一夫一婦ノ道ヲ嚴ニ循守セシムル時、連綿

間断ナキ男子ノ生産力ハ其妻ノ懐胎ノ間全ク

無益ニ属ス可シト虽モ若シ数婦ヲ置クヲ許ル
ス時ハ常ニ其生産力ノ益アル可キハ政ニ数婦
ヲ置クハ人口ノ増殖ニ益アルカ如ク思ヒテ然
ル時ハ数婦ヲ置クノ害ハ人口ヲ寡少ナラシム
ルニアラス却テ之ヲ夥多ナラシムルニ在リ
然レハ欧羅巴ニ於テハ数婦ヲ置クノ制ハ人口
ヲ増殖セシメス却テ之ニ害アルノ説アリテ之
レヲ証スル為メ土耳其及ヒル餘ノ回々教ノ各
國ニ於テ其人口ノ増殖スル進歩ノ耶蘇教各
國ニ及ハサル例ヲ引キタリ

然ルニ土耳其等ノ各國ニ於テ斯ク其人口増殖
ノ遅々タルハ数婦ヲ置クノ制ニ因ラズ更ニ他
ノ原由ニ因ルヲ証スルコト敢テ難キニ非ズレ
テ殊ニ近年ニ至ル迄人民其財産ヲ安全ニ享有
スル能ハサリシハ其原由中ノ最モ重大ノ者
タリ
又回々教各國ニ於ケル数婦ヲ置クノ制ハ全ク
婦ヲ幽閉シテ外行ヲ許サズ因テ其身は虚弱
ニ至リ母タルニ適マサラシム又男子ノ如キニ
遊惰柔弱ニシテ淫逸ニ流レ之レカ為メ出産ノ

教ヲ大ニ減少セシム
其他又此等ノ各国ニ於テハ男女共ニ其子ヲ養
育スルヲ樂シト為サバレルノ漢アリテ加之兒童
ノ健康ヲ保全スル法方ヲ知ラサルカ為メ其死
スル教極メテ多シ

故ニ之ヲ概言スレハ回々教各国ニ於テ人口ノ
寡ナキハ教婦ヲ置クノ制ニ因ルニ非ス政治修
身保健經濟上ノ種々ノ原由ニ因ル若タリ
試シニ問フ此等ノ原由ハ日本ニ於テモ之レア
リヤ曰ク余ガ見ル所ヲ以テスレハ然ラス蓋シ

日本ニ於テハ各人ノ財産ハ概シテ皆細小ナリ
ト虽モ安全ニ之ヲ享有スルヲ得可ク因テ一家
ノ長タル者子ヲ養クルニ敢テ之ヲ慮セサレ
ハ故ナラ好シテ子無キヲ欲セス又婦女ハ居室
内ニ幽閉セラレ、トナキニ因リ其身体心神共
ニ壯康ニシテ母タルニ造ス可ク又男子ハ其行
ニ嚴肅ニ過キスレテ而シテ謗ニ言フ東洋風ノ
情弱ニ流ル、トナク又其身体ハ剛強ト稱ス可
キニ非レズ之ヲ矜シテ柔弱ト言フ可キニ非ス
且フ父母タル者其子ヲ養育スルヲ以テ樂シト

為セハ其保健ノ法方モ亦宜シキヲ得ル者ト言
フ可シ

然リ而メ右ノ諸事ハ敢テ数婦ヲ置ク制ノ効績
ニ非スト虽モ其制ハ人口ヲ増殖セシムル諸般
ノ原由ニ障碍ヲ為スニ非ルナリ

然ラハ即チ問フ数婦ヲ置ク制ノ害ハ前ニ記ス
ル者ト相反スルニ非スヤ又其制ノ為メ人口ヲ
過多ナラシメ國ノ財源ト需用ノ鈎合ヲ失ハシ
ムルニ非スヤ曰ク其答ハ二様タレハ左ニ之ヲ
掲ク

抑々経済学及統計学ニ人口ノ増殖ハ國ノ食
料ノ源ト常ニ其鈎合ヲ同ウスルヲ証明セシハ
既ニ數年以前ニ在リテ人口ハ食料ノ豊カナル
ト共ニ増シ食料ノ乏シキト共ニ減シ而シテ其食
料ノ豊饒缺乏ハ或ハ國中一般タリ或ハ一地
方ノみに限レル也又ハ永久タリ或ハ一時タ
リ也其人口ノ増減ニ饗應スル効績ハ常ニ同シ
クシテ変易ナク要スルニ表ノ天法ニ基ク者タ
リ
故ニ数婦ヲ置ク制ノ為メ日後日本ノ人口ヲ

テ其最大数ニ至ラシメ其増殖ハ此ニ於テ止マルコト

然ルニ吾輩ノ経験スル所ニ依レハ国ニ人口増殖スル時ハ耕作ノ進歩ニ益シ工作ノ方精巧ニ至リ人々ノ労働ノ為ノ製造耕作ノ産物ヲ増シテ以前ニ十倍セシメ又人口ノ多キ国ハ貿易交換ノ法方ニ因リ他国ノ利益ニ参加シテ其物産及ヒ財源ノ一部ヲ已レ所得ト為スヲ得可ク例ヘハ白耳義荷蘭英吉利如キハ其土地ノ廣サニ准シテ之ヲ言フ時ハ其人烟ノ稠密ナル支

那ノ右ニ出ワルルモ右三国ノ食料ノ源ハ亦支那ニ比スレハ更ニ夥多ナリ是レ蓋シ右三国ノ人民ハ勤劳勉勵シテ其業ヲ行フカ為ノ其勉業ト貿易トニ因リ以テ其土地ノ狭小ナルヲ補フニ在リテ唯米利堅ハ之レニ反シ聯邦中専ラ農業ニ勉ムル地ニ於テハ幾ント其土地ヲ耕サスレテ毎量ノ財源ヲ有シ而シテ其人口ノ増殖ハ實ニ古今未嘗有ニシテ三十年間ニ二倍シ之レカ為ノ故ニ数婦ヲ直ク制ノ助ケヲ要セス又日本ハ其土地極メテ廣大ニ非レド其地ニ

開墾スル時ハ方今ノ人口ニ更ニ其半バツ加ヘ
シ人口ヲ養ハ又或ハ方今ニ二倍ヒシ人口ヲ養フ
ヲ得ヘク又農業ノ方ハ更ニ之ヲ良好ナラシメ
工作製造ノ業ノ如キハ今ヨリ新タニ之ヲ開ク
可シ

此ニ由テ之ヲ觀レハ日本ニ食料ノ不足ナルヲ
為メ前文ニ記セシ如ク人口増殖ノ即カラ止マ
ル可キ期ハ未タ何レノ時ニ来ル可キヤヲ知ラス
故ニ余ハ此最初ノ疑問ニ付テハ日本ニ於ケル
数婦ヲ置クノ制、回々教ノ各国ニ於ケル如ク

男女婚姻ヲ為スト虽モ其間ニ子ヲ奉ケルノ
弊害ヲキテ決定スル所ナリ

日本ニ於ケル数婦ヲ置クノ制ハ其人口ヲ増殖
ス可シト虽モ之ヲシテ過多ナラシム可キノ恐
レナシ何ントナレハ経済学ノ法術ヲ用ヒテ國
ノ財源ヲ増サレハル時ハ其財源ハ人口ノ増殖
ト共ニ増ス可キニ因レリ
第一ニ数婦ヲ置クノ制ハ其ノ康福及メ社會上
ノ地位ヲ高スルマ
若シ数婦ヲ置ク制ノ為メ一夫一婦ノ制ニ比ス

レハ更ニシテ、社会上ノ地位ヲ卑下ナラシム
トアル時、是レ必ス教婦ヲ置ク制ノ弊害ナリ
ト虽モ現ニ此クノ如キ事アラズ又此クノ如キ
事アルノ理ナレ

夫レ國中婦女ノ教頗ル増シ男子一人ニシテ教
婦ヲ置キ得可キニ至リシ時若シ一夫一婦ノ制
ノ嚴密ナル時ハ婦女中ニ就キ終身獨居タル者
又甚タ多カル可シ

夫レ婦女ノ人ノ妻タルヲ欲スルヨリ、却テ其妻
タルヲ欲スル者アルハ極メテ希クニ爲ス(若シ

斯クノ如キ者アル時ハ即チ妾トシテ、利益ア
ルヲ証明シテ既ニ此疑問可ク云、詳釋スル
者タリ)故ニ一婦ヲ置クニ欲スル輩皆先ツ其婦
ヲ得タル上ニ非レハ一人ニシテ教婦ヲ置ク能
ハサルヲ承認ス可キナリ

此ニ由テ之ヲ觀レハ教婦ヲ置ク制ニ於テ人ノ
妾タル若ハ若シ一夫一婦ノ制ニ於テハ必ス獨
居シテ子ヲ奉クルトナラズ、恐クハ又窘困ニ迫ル
ニ至ラン
若シ一地ニニ限リ又ハ一期ニ限レル出未事ア

為メ男児 産ル、数甚ク多ク、女兒ノ産ル、数
甚ク少キ時ハ其男女両児ノ長シテ人ト成
ル期ニ至テハ教婦ヲ置キ、用ヲ可カラス
欧羅巴ニ於テハ男女両児ノ出産ノ数畧ク相同
シト、虽モ成長セシ者ノ数ヲ量ル時ハ男より女
ヲ多シトシ、婚嫁スルヲ得サル婦女ノ数ハ頗ル
夥多ナリ又、其中多数ハ終身獨居シテ子ヲ奉
ケス、又然ラサレハ放蕩行儉ノ行ヒテ為シ其已
レノ為メ、社會ノ為メニ害アルハ法律上ニ定
メシ、妻ノ身分ニ在ルト同日ノ論ニアラス

余カ案スル所ニテハ凡ソ日本ニ於テ人 妻ト
ナル婦女ハ正当ノ婚嫁ヲ結フヲ得、若ク又
ハ其自由ノ權ニ因リ妻トナリテ貧困ニ迫ルヨ
リモ寧ロ妻トナリテ富有ナルヲ貴ク者ニ限ルハシ
第三 教婦ヲ置クノ制ハ夫ノ為メ貧困窮迫
原由ニシテ國ノ繁盛ノ基本タル財本貯蓄ノ道
ヲ害スルニアラスマヤ

日本ニ於テハ歐洲各国ニ比スレハ其財本貯蓄
ノ更ニ乏シキヲ明白ニシテ是レ日本ノ富饒ナ
ラサル原因ノ一タリ然レモ試ニニ問教婦ヲ置

クノ制ハ人財産ノ少ク其資本ニ乏レキ
一大原由タリヤ曰ク然ラス而^其重大ノ原由ハ
数多アリテ夫ノ東洋風ノ先ナキ輕率ノ意思
差ニ勞業ヲ好ムノ念ナキニ因リ各人僅カニ其
日ノ生ヲ遂クル時ハ之ヲ以テ足レリト爲ク弊
害ノ如キハ固トヨリ古ノ大原由トリト虽モ姑
ク此ニ之ヲ論セス(右ノ弊害ハ宜シク他國ノ模
範ニ倣フテ之ヲ改ム可シ然レモ強テ一時ニ改
ムレム可カラス)日本國ノ經濟及ニ民生上ノ制
度ヲ左ニ論セントス

先ツ右ノ中ニ就キ重要ナル者トシテ
之ヲ言フニ土地所有ノ權ノ如キハ平民ニ於テ
ハ容易ニ之ヲ得ル能ハス而シテ又例外ノ事
アリト雖モ是レ亦未ダ判然確定セシ者ニ非ス
故ニ平民ノ爲メニハ其財産ヲ得可キ重要ナル
基本ヲ缺ク若ト言フ可シ
夫レ政羅巴ニ於テ財本貯蓄ノ驚ク可キ勢力ヲ
表示シ鐵道造築ノ用ニ數千万ノ大金ヲ供スル
ヲ得セシメタルハ土地所有ノ權ノ障碍ヲ除去
シタルニ因レリ然ルニ日本ニ於テハ是レ迄其

障碍ヲ除去スルニ着眼セシレハ今ヤ之ニ着眼
ス可キノ好機會タリ故ニ教婦ヲ置クノ制ハ各
人私産ニ乏キノ原因ニアラスレテ若シ教婦ヲ
置ク者ハ貧困シ一婦ヲ置ク者ハ富有ナルノ証
アルニ非レハ余ハ教婦ヲ置クヲ以テ各人貧困
ノ原因ト為スノ論說ニ服ス能ハサルナリ
又衆令若シ妾ヲ置クカ為メ夫ノ財産ハ幾許カ
減少ス可シ為スモ之レカ為メ妾ノ父又ハ其家
族ヲ富マシ其貧困ノ濟フコトヲ得可シ是レ唯々
僅カニ費用ノ出處ヲ改シタルニシテ敢テ

之レヲ重罰ナラシメクルニ非ス

又法律ヲ以テ妾ノ數ヲ限制スルノ一事ハ政治
上ノ道理ニ據テ之ヲ為ス可シト虽モ經濟上ノ
道理ニ於テハ敢テ之ヲ問フコトナシ

此書中記載スル所ヲ概言スルニ蓋シ余カ論說
ハ固ト全ク歐洲風ノ意見ト相離レ獨リ日本ノ
資益ヲ思フヲ以テ其主眼ト為セハ今教婦ヲ置
クノ制ヲ廢スル時ハ必ニ其害アリテ其制ヲ廢
スルカ如キハ己ムヲ得ナル事ニクシテ古來ノ
習慣ニ觸レ日本政府之レカ為メ其人望ヲ失フ

可キヲ辨明ス然リ而ノ其他別ニ其益大ニシテ
亦敢テ人心ヲ害セサル改革ノ信目教多アリテ
之ヲ要スルニ教婦ヲ置クノ制ハ修身ノ道ヨリ
之ヲ論スルモ強テ之ヲ禁ス可キニ非ス又經濟
ノ道ヨリ之ヲ論スレハ日本ノ為ノ危殆キ者
タリ

千八百七十五年七月十八日

於東京

ゼ、ボワソナード

第七章

日本政府「モルモン」ノ蝦夷ニ遷移スルヲ勸励セ
ント決セハ小心翼々トシテ事ヲ處モサル可ク
ラス「モルモン」人ヲシテ一夫數妻ノ制ヲ棄テシ
メントスルカト同一ノカハ日本帝國ノ人民ヲ
シテ耶蘇教ニ改教セシメント欲ス思フニ此力
ヲ有セル人々ハユタ住民ノ日本ニ遷ルヲ嫌ヒ
カヲ竭シテ之ヲ防ク可シ但シ合衆國政府是等
ノ人々ヲ助クルハ余ノ思料セサル所ナリユタ
一條ハ大統領ノ職ニ在ル者之ヲ定ムルノ方法

アリト明知スル時ハ忽諸ニスルヲ欲セサル障
碍ニシテモルモンノ蝦夷ニ遷ルハ大統領ノ為
マニハ障碍ヲ除クノ最モ容易ナル方法ナルヲ
以テ大統領ハ之ヲ拒マサルヲ利益トス可シ然
レ既合衆國中教法固執ノ徒モルモンノ其良ニ
轉居スル商議アリト察セハ陰謀ヲ施シテ大統
領ノ心ヲ動カサンモ測ル可カラス故ニ其徒ニ
知ラシメスシテ事ヲ為スヲ良シトス日本政府
此策ヲ可トセハ先ツ第一ニ適宜ナル外人帰籍
ノ法ヲ作リ帝國舊來ノ習慣ノ集ノ其部類ヲ分

チ其缺典ヲ補ヒ之ヲ一ノ法律書ト為シ勤勞業
業ヲ安全ナラシメ以テ時世ノ要ニ應ス可シ若
シ之ヲ行ハサレハ獨リユタノミナラス何レ
地ヨリモ遷移スル者無クラン次ニ政府ハ適當
ノ人ヲ選ミモルモンノ酋長中最モ日本政府ノ
意見ヲ可トスヘキ者ヲ察シ密クニ之ト商議ヲ
開カシム可シ斯ル處分ハ全ク法律ニ反セスシ
テ他ノ方法ヲ用フルヨリモ米國政府ノ利益ヲ
ラン其故ハ後ニ至リ米國政府ニ向テモルモン
ノ遷移ヲ拒マサリシヲ答ル者アルトモ米國

政府ハ始終之ニ干涉セス或ハ之ヲ知ラザリシ
シテ以テ答ト為ス¹テ得レバナリユタ社中ノ
酋長等ト商議ヲ為サシムルニハ其敬重信任ヲ
得ヘク且ツ從來日本ノ事ニ經練シテ彼等ニ日
本ノ形況ヲ知ラシメ彼等ヲシテ轉居ノ誘引ヲ
危疑スル¹無カラシムヘキ人ヲ用フ可シ斯ル
人ヲ得ルハ頗ル難シト虽トモ終ニハ之ヲ見出
シ得可シ余ハ余ノ自カラ主張シタル布圖¹ヲ
々稱揚スルヲ好マサレトモ¹モルモン蝦夷轉居
ノ事實地ニ成就シタルノ日¹其ノ彼等日本ノ管

轄ニ安シタリト自カラ公言シタルノ後ハ¹キ
ニ此書札ニ預言シタル目的ヲ遂クルノミナラ
ス魯西亞ノ日本ニ向テ札ヲ厚クシテ交ヲ求
ルコト猶政羅巴ノ大國ニ對シテ交ヲ求ムルヤ
ゴトクナル可シ

諸國ノ交際モ猶一人ト一人トノ交際ノゴトク
利害得失ニ依ルモノナリ地理上ノ位置ト利害
得失ヲ共ニスルトモ因テ親密ノ盟好ヲ保ツハ
キコト恐ラクハ日本ト魯西亞ノ兩國ニ過キタ
ル者無カルヘキ所以ハ余記錄第四十二號ニ之

ヲ載セタリ然レトモ日本威カノ強大ナルヲ示
シテ其魯西亜ト結ビタル盟好ヲ魯西亜ノ日本
ト結ビタル盟好ト同一ノ價位ニ至ラシメサレ
ハ此盟好ハ永續スル能ハスモルモンノ蝦夷遷
移ノ策ハ大イニ此場合ノ必要ニ應スルモノニ
シテ法律ノ改正成就スレハ實地ニ行ハル可レ
又英國日本ニ對シテ使令ヲ為スコトハ現今
本ノ力弱ハキヨリ起ル所ニシテ日本自己
若クハ盟好ノ助ニ依リ其勢強盛ナルニ隨テ次
第ニ減ス可レ若シ日本ノ政治家心ニ之ヲ疑

者アラハ一千八百七十五年五月五日即チ今ヨ
リ終カニ箇月餘前ニ倫敦ナル社中ノ集會ニ於
テ鐵及ニ鋼鐵社中ノ頭取メ子レウス氏ノ演述
シタル言能ク其疑ヲ散ス可シ蓋シ此演述ノ趣
旨ハ英國ノ鐵他國ノ製造ト相競フテ勢カヲ失
フコトヲ表センカ為メニシテ左ノ教言ヲ以テ
終レリ曰ク英國ハ好キ市場アレハ父ス其勢ヲ
落ヤス鐵器ニ於テハ長ク世界ノ工場タニシ然
レハ實地ニ於テ英國ノ鐵及ニ鋼鐵ハ政羅巴
ノ緊要ナル市場及ニ亞米利加合衆國ヨリ驅逐

セラレ英國ノ製造ヲ衰微セシムル目的ナリト
公言シテ重キ輸入税ヲ賦シ現今其成跡ノ余輩
ニ感スル甚タシク余輩ハ全ク亞墨利加ノ市場
ヲ失ヒタリト見ユ余思フニ余輩此地位ニ居ル
モ甘シシテ之ヲ受ケ別ニ我商賣ヲ束縛スル
意アルトモ之ヲ行フノ力無キ諸國ニ於テ我産
物ノ新市場ヲ求ムルノ備ヲ為サル可カラハ
ト
上ノ言ハ能ク英國ノ外国交易ヲ利スルノ策ヲ
寫シ出セリ此地位ニ在テモルキ
ンノ遷移ハ當

ニ日本將采ノ事ニ感スルノミヲラス大イニ日
本ノ政治家ヲ苦マシムル現今ノ務譬ハハ海關
税及ヒ外國居留人管轄等ノ事ニ於テモ亦關係
小ナラサル可シ若シ政府モルモン
レ遷移ノ策ヲ
取用シテ首尾能成功セハ是等ノ事ヲ處スルニ
甚タ簡易ナル可キハ余カ固ク信シテ疑ハサル
所ナリ

一千八百七十五年七月十八日東京ニ於テ

チ、ダブルウ、リ、ゼ、ン、ド、ル、謹言

大藏卿大隈重信殿閣下

